資本制生産における管理労働の二重性

——労働過程と価値増殖過程の関係——

頭　川　博

はしがき—問題の所在

周知の通り、資本主義的生産の完成した姿である機械制大工業は、分業にもとづく協業を基礎に成り立つ。従って、分業にもとづく協業を基礎とする機械制大工業では、一つの完成生産物は一連の発展段階にある各作業部面での部分労働の積み重ねの上に初めて産出される。つまり、分業にもとづく協業体制の下での商品は、一人で多面的な労働を行なう個々の労働者の個人的生産物から部分作業だけを一面的に行なう多数の部分労働者全体の社会的生産物に転化するのである。それだから、多数労働者が互いに関連する各工程にわかれてそれぞれ部分労働のみを行なう社会的労働過程では、生産物に直接的に手を下す多数労働者の上に立って社会的労働過程全体を統括すべき管理労働が必要不可欠である。いうまでもなく、管理労働がそれぞれ部分労働を行なう多数労働者からなる生産体制から内在的に生じるかぎり、その統括機能は生産の社会的形態に無関係な超歴史的性格をもつ。ところが、マルクスによれば、分業にもとづく協業体制を一つの統一のとれた社会的労働過程として管轄する管理労働は、資本主義的生産体制において、超歴史的な統括機能と同時に特殊歴史的な搾取機能を果たし、もって相異なる二重的機能を演じるという。

「資本家の指揮は内容から見れば二重的であって、そ

れは、指揮される生産過程そのものが一面では生産物の生産のための社会的な労働過程であり他面では資本の価値増殖過程であるというその二重性によるのである。」(『資本論』I、三五一ページ)

そこで、われわれにとって、同じ管理労働が発揮する超歴史的な統括機能と特殊歴史的な搾取機能とは如何なる内在的な関係にあるのかというごくプリミティブな疑問が生じる。というのも、統括機能と搾取機能とは概念上決定的に区別されるべき二つの相異なる機能であるから、同じ管理労働が二つの機能を果たすといってもそれだけでは二つの機能の同時性の説明にしかならず、同じ管理労働が如何にして相異なる二つの機能を発揮しうるのかという両者の内面的関係が判然としないからである。つまり、マルクスの規定した管理労働の二重性に関する基本論点は、同じ管理労働が如何にして二つの相異なる機能を果たしうるのかという二つの機能の内在的関係如何の考察にある。ところが、われわれのサーヴェイによれば、一つの管理労働が演じる統括機能と搾取機能とは如何なる内在的関係にあるのかという管理労働の二重性についての最も基本的論点に対して従来本格的考察が提出されていない。というのも、管理労働の二重性に関する従来の考察では、同じ管理労働が同時に統括機能と搾取機能とを発揮すると説明するに留まるからである。しかし、同一の管理労働が同時に二つの相異なる機能を発揮するというだけでは管理労働の二重性についてのマルクスの規定の考察としては決定的に不十分である。なぜならば、管理労働の二重性とは、管理労働の果たす超歴史的な統括機能がそのままで特殊歴史的な搾取機能を発揮する両者の不可分の関係に帰着するからである。つまり、管理労働の二重性とは、超歴史的な統括機能がそのままで特殊歴史的な搾取機能を営む二つの機能の関係にほかならないのに、従来の考察では単純に統括機能と搾取機能との同時性が指摘されているにすぎない。

それゆえに、本稿の課題は、管理労働の果たす統括機能がそのままで搾取機能を発揮する両者の内在的関係を分析して、管理労働の二重性に関するマルクスの規定に本格的考察を加えることにある。以下、先ず第一節で、単純流通上で売買される労働力商品が剰余労働を創出する独自な使用価値をもち、生産過程での剰余価値形成がすでに労働力商品の独自な使用価値により規定済みであ

ることを分析する。続く第二節において、労働過程と価値増殖過程との関係を考察して、価値増殖過程とは具体的有用労働の支出からなる労働過程をそのまま剰余労働の創出過程としてみたものであることを明らかにする。最後の第三節において、管理労働の果たす統括機能がそのままで必要労働をこえる具体的有用労働の支出の条件をなすことを分析して、二つの相異なる機能の内在的連関を究明する。管理労働の二重性に関する『資本論』に内在した本稿の積極的分析によって、管理労働の二重的機能がそれぞれ労働過程と価値増殖過程とに帰属するのか否かという一大論争点に最終的決着がつくことになろう。

一　労働力商品の独自な使用価値

資本の規定的目的をなす剰余価値は生産過程での必要労働時間をこえる労働日の延長によって創造されるから、剰余価値生産といえば人はもっぱら生産過程にのみ注目する。しかし、マルクスの教えるところに従えば、剰余価値形成は単純流通上で売買される労働力商品の独自な使用価値のうちに即自的に含まれているのである。つまり、生産過程での必要労働をこえる剰余労働の創出は、単純流通上で売買される労働力商品の独自な使用価値の単なる実証にすぎない。そこで、本節では、生産過程での剰余価値創造がすでに単純流通上で売買される労働力商品の独自な使用価値のうちに即自的に内包されている所以を確定する。

周知の通り、貨殖の秘密は労働日が労働力の価値を補塡する点をこえて延長されるところにある。しかし、貨殖の秘密をもって労働力の価値を補塡する点をこえる労働日の延長というところに求めて満足するとすれば、それは決定的に片手落ちである。というのも、貨殖の秘密に関する問題の一焦点は、労働日が何故に労働力の価値を補塡する点をこえて延長されるのかにこそあるが、生産過程の考察は必要労働時間をこえる労働日の延長の本質的理由を解決しないからである。それでは、資本家は何故に労働日を必要労働時間以上に延長しうるのであろうか。いうまでもなく、それは、生産過程での資本家の労働者に対する直接的な強制作用の結果ではありえない。直接的生産過程は、資本家と労働者とが対等平等な商品所有者として相対する単純流通の基礎上に成り立つから

である。マルクスの独創的な理論によれば、資本家が労働日を必要労働時間以上に延長できるのは、単純流通上で売買される労働力商品がすでに剰余労働を創出する独自に社会的な使用価値をもつからにほかならない。すなわち、われわれは労働力商品の売買関係についてともすれば労働力商品が価値通りに販売される点にのみ着目する傾向を免れないが、ここでは資本家が労働力の価値と引き換えに労働力の使用権を取得する固有な関係に極力注意を払う必要がある。そうすれば、労働日は労働力の価値と引き換えに譲渡した労働力の使用権の特定の大きさに等しいから、概念上労働力の使用権に表わされる生きた労働量は既に労働力の価値に表わされる対象化された労働量よりも大きいことになる。つまり、労働力の価値と労働力の使用権とはそれぞれ対象化された労働と生きた労働とに還元されるから、労働力の価値と引き換えでの労働力の使用権の譲渡は、より少ない対象化された労働量に対してより多くの生きた労働量を引き渡す事実上の不等労働量交換に帰着する。従って、一労働日が必要労働時間以上に延長されるのは、労働力が支払われる労働よりも大きな生きた労働を表わす独自な商品として販売される点に由来する。それだから、生産過程で創出される剰余価値は、それが労働力商品のもつ独自な使用価値の単なる実証結果でしかないかぎりでは、対象化された労働が本質的に単純流通上でそれよりも大きな生きた労働を支配することから生じるのである。(1)

それでは、労働力商品は何故に単純流通上ですでに剰余労働を創出する独自な使用価値をもつのであろうか。労働力商品の独自な使用価値は労働力の一時的な使用権に帰着するから、労働力商品が剰余労働を創出する独自な使用価値をもつ根拠は労働者が労働力の使用権を商品として販売する社会的な理由に求められるべきである。そうであるとすれば、労働力商品が剰余労働を創出する独自な使用価値をもつ理由は、労働者が生産手段と生活手段とからなる社会的富から排除され無産の立場にあるからだということになる。従って、生産手段と生活手段とからなる社会的富の労働者からの排除こそが、労働力を強制的に商品たらしめ、その労働力商品に対して剰余労働を創出する独自な使用価値を付与するのである。それだから、剰余労働を創出するという労働力商品の独自な使用価値は資本主義的生産関係が生みだしたその必然

的な産物にほかならない。逆にいえば、労働力の生産的発揮による剰余価値生産をもって労働力に固有に内在する本来的属性の単なる実証とみる見方ほど無概念的な考え方はないといってよい。因みに、宇野弘蔵氏は、商品として購入された労働力による剰余労働の創出をもって労働力に超歴史的に具わる自然的属性であると主張された。(2) しかし、宇野氏の主張には生産過程における剰余労働の創出が単純流通上での労働力の使用権の譲渡という特殊歴史的な形態に立脚して行なわれる客観的事実の閑却がある。従ってまた、生産過程での剰余価値創造は単純流通上での資本家と労働者との間の対等平等な貨幣関係を前提とするだけであるとすることによって生産過程内部での支配従属関係の貫徹を否定する宇野弘蔵氏の主張(3)は根本的に成立しない。なぜならば、資本家は確かに形式上労働者と対等平等な立場で相対しあう単純流通上で購入した労働力商品を生産過程において産業的に消費するにすぎないが、労働力の使用権の商品化が資本主義的階級関係の一表現形態をなすかぎりでは、労働力の使用権の現実的行使そのものが資本主義的階級関係の貫徹にほかならないからである。宇野氏にあっては、労働力商品売買が形式上資本家と労働者との間の対等な貨幣関係として行なわれる一点のみが絶対化され、労働力の使用権の売買が社会的富を排他的に所有する資本家と無産の労働者との間の特定の階級関係の一表現形態であるという点の基本認識の欠如がある。それだから、一歩議論を進めていえば、剰余労働の創出をもって労働力の自然的属性とみる宇野氏の論法は、資本＝賃労働関係をもって本質的に自然的関係に置き換える論法に等しい。しかも、剰余労働創出を労働力の本来的属性とみる主張と剰余価値生産をもって絶対的法則とする資本主義的生産を一つの階級社会と規定する主張とは二律背反の関係にある。けだし、資本主義的生産が一つの階級社会として成り立つ扇の要は、生産過程での剰余労働創出の中に貫徹する支配従属関係にあるからである。なお、参考のために紹介しておけば、経済学史上剰余労働を労働力の固有な属性に転化させそこに貫徹する階級関係の作用を否定しようとしたのは、プルードンとJ・S・ミルであった。

『あらゆる労働はある剰余をのこす』、『私はそれを公理であると主張する』…プルードンは、必要労働以上に

労働がおこなわれるということを、労働の神秘的な属性に転化させている。」（『経済学批判要綱』Ⅲ、五三四ページ、傍点―マルクス）

「利潤が生まれる原因は、労働が、それの維持に必要とされるところのもの以上のものを生産する、ということである。」（J・S・ミル〔3〕四〇九ページ）

それだから、更に一歩踏みこんでいえば、『資本論』第Ⅰ巻第二篇第四章第三節「労働力の売買」の主題は、労働力の価値と引き換えでの労働力の使用権の取得が対象化された労働よりも多くの生きた労働の取得を意味することを考察することにあった。すなわち、マルクスは、そこで、$G-W-G'$の矛盾を解決する切り札としてその産業的消費が価値創造である独特な一商品としての労働力を単純流通上にみいだした上で、労働力の商品化を規定する基本条件と労働力商品の価値規定に考察を加えている。ところが、ここでわれわれは、まずもって労働力の使用権の販売が労働者にとって社会的富からの排除による経済的強制にもとづくというマルクスの指摘に注目すべきである。そうするならば、労働力の商品化はそれ自体労働者の資本家に対する経済的従属関係の一つの表現形態であることになり、労働者の資本家に対する経済的従属関係を内包する労働力の使用権は一つの可変量として労働力の価値よりも大きいことになる。そもそも、労働力の価値と引き換えに受けとる労働力の使用権の行使は一般的に労働力の価値を再生産するのに必要な特定の大きさに少しも限定されていないからである。因みに、$G-W-G'$に内在する矛盾は、労働力の使用権が労働力の価値に表わされる対象化された労働よりも大きな生きた労働を表現する限りでのみ解決されるのである。けだし、労働力の価値と引き換えでの労働力の使用権の譲渡が対象化された労働よりも多くの生きた労働の譲渡である限りでのみ、労働力の売買は、剰余価値が$G-W-G'$内部で生じると同時に生じえないという$G-W-G'$の矛盾を形成する二つの対立的契機をともに満足させるからである。(4)

かくして、われわれは、以上の考察によって、単純流通上で売買される労働力商品がその背後に存在する資本主義的生産関係に規定されて剰余労働を創出する独自な使用価値をもつことを明らかにした。従って、資本の生産過程とは、資本家が単純流通上で対象化された労働と

引き換えに取得したより多くの生きた労働を表わす労働力の独自な使用価値の単なる実証過程にほかならない。(5)

（1）「対象化された労働日がより多くの生きた労働日を支配するということは、あらゆる価値創造と資本創造の真髄（pith）である。」（『経済学批判要綱』Ⅲ、四九三ページ）

（2）宇野弘蔵〔2〕八七―九〇ページ。

（3）剰余価値生産に貫徹する支配従属関係の宇野氏による否定は、「商品関係は資本主義社会の中心基軸をなしている」（宇野〔1〕一五ページ）という一文に明確である。

（4）従来労働力商品が単純流通上ですでに剰余労働を創出する独自な使用価値をもつことが等閑に付された一つの理由は、資本家が何故に生産過程で労働日を必要労働時間以上に延長できるのかという一基本論点が提出されなかったところにある。つまり、労働日を必要労働時間以上に延長しうるのは何故かを問うならば、人は必然的に労働力商品が剰余労働を創出する独自な使用価値をもつというマルクスの解いた真理に到達することになる。そして、労働力が剰余労働を創出する独自な使用価値をもつかぎりでのみ労働日の必要労働時間以上への延長が可能であるとするならば、労働力の独自な使用価値の確定は第四章第三節「労働力の売買」の課題であることになる。従って、労働力商品の独自な使用価値がすでに第四章第三節で確定済みであるとすれば、$G-W-G'$に内在する矛盾は第四章の枠内で解決され、第四章「貨幣の資本への転化」はその表題通り貨幣の資本への即自的転化を単純流通上で論証し終えたことになる。

なお、第四章「貨幣の資本への転化」に関するわれわれの積極的見解はすでに拙稿「貨幣の資本への転化とは何か―単純流通と貨幣の資本への転化―」（(14)）で公表済みである。

（5）資本とは本質的に社会的生産関係であるという『資本論』の一根本命題は、貨殖の秘密が労働力商品の独自な使用価値に表現される資本主義的階級関係にあるという事柄の集約的表現にほかならない。換言すれば、剰余労働を創出する労働力商品の独自な使用価値は単純流通の根本前提である資本主義的所有関係そのものの必然的産物であるから、剰余価値生産を本質的機能とする資本は本質的に特定の生産関係に帰着するのである。

二　労働過程と価値増殖過程の関係

われわれは、前節において、単純流通上で売買される労働力商品がそれ自体資本主義的生産関係の産物として剰余労働を創出する独自な使用価値をもつことを考察した。ところで、労働力の独自な使用価値はそのままでは単に剰余労働を創出する可能性にすぎず、生産過程での産業的消費によって初めてその可能性を実証する。そこ

で、本節では、超歴史的な労働過程と特殊歴史的な価値増殖過程との内在的な関係を本格的に分析して、剰余価値が具体的には如何にして創造されるのかを究明する。

資本の生産過程は、労働過程と価値増殖過程との直接的な統一をなす。しかし、資本の生産過程が労働過程と価値増殖過程との統一をなすといっても、価値増殖過程は労働過程そのものの一面にすぎない。けだし、価値増殖過程といっても、それは特定の使用価値をつくる労働過程を媒介にして労働過程の中で進行する以外にありえないからである。つまり、価値増殖過程は、労働過程の上に成り立つのではなく、労働過程の内部に成り立つのである。ところが、そうであるとすれば、特殊歴史的な価値増殖過程が超歴史的な規定性をもつ労働過程の内部で成り立つというのは如何なることかというごく初歩的な疑問にわれわれは直面する。というのも、一方で労働過程をもって超歴史的な過程であると規定しながら他方で労働過程の内部で特殊歴史的な価値増殖過程が成立するという論法は、前後撞着の誤りを冒さずして成り立たないように思われるからである。われわれのサーヴェイによれば、従来超歴史的な規定性をもつ労働過程と特殊歴史的な価値増殖過程とが機械的に分離されたままで理解され、超歴史的な規定性をもつ労働過程の内部で特殊歴史的な価値増殖過程が成り立つ両者の内面的脈絡が必ずしも明確でない。そこで、以下、超歴史的な規定性をもつ労働過程の内部で価値増殖過程が成り立つ両者の連繋を分析しよう。

周知の通り、マルクスは、『資本論』第Ⅰ巻第三篇第五章「労働過程と価値増殖過程」で資本の生産過程を先ず労働過程として一般的に考察した上で次に価値増殖過程として分析し、もって資本の生産過程の総体に照明を与えた。そこで、人は通常価値増殖過程を労働過程の上に成り立つ一過程として観念すると同時に労働過程を単純に価値増殖過程の一般的基礎として押さえるだけで満足する傾向を免れない。しかし、われわれの考え方によれば、価値増殖過程の一般的基礎としての労働過程の位置づけに関する従来の解釈はその具体的詰めの点で不十分であると思われる。というのは、従来、労働過程が価値増殖過程の一般的基礎をなすとは、価値増殖過程そのものが特定の使用価値でしかない生産手段と合目的的な生産活動としての具体的有用労働という労働過程の二大

契機によってのみ営まれることを意味するという指摘がドロップしたままで、単純に言葉の上だけで具体的意味内容不明のまま労働過程が価値増殖過程の一般的基礎をなすと主張されたにすぎないからである。つまり、価値増殖過程が労働過程の内部に成り立ち労働過程が価値増殖過程の一般的基礎であるのは、価値増殖過程そのものが超歴史的な規定性をもつ生産手段と具体的有用労働という労働過程と同じ二つの契機によってのみ成り立つからにほかならない。先ず第一に、労働過程では、生産手段は特定の使用価値としてのみ存在してその固有な自然的属性を発揮し、価値としては存在しない。たとえば、綿織物の生産過程では、織機や綿糸が綿布の生産に役立つのは、それぞれが綿布の手段や材料としてもつ自然的な属性においてにすぎない。つまり、生産手段は、労働過程において、単純に特定の使用価値をもつ超歴史的な定在としてのみ存在し、その特定の自然的属性に応じて特定の労働力と接触するのである。因みに、生産手段が特定の使用価値としてのみ存在してその自然的属性を発揮するということは、それが労働過程では具体的有用労働の形態にしかないということと同じである。第二に、特定の使用価値としてのみ機能する生産手段と接触する労働力は、労働過程では、使用価値に結実する具体的有用労働という姿態でのみ合目的的に支出される。つまり、労働力が特定の使用価値をもつ生産手段との対応関係の下でのみ産業的に消費されるということは、労働力の消費が人間の肉体的諸器官の特定の合目的的な発揮としてのみ行なわれ、特定の具体的有用労働としてのみ流動化するということに等しい。従って、資本の生産過程では、生産手段は特定の使用価値をもつ超歴史的な定在としてのみ機能し、労働力は特定の使用価値に表わされる超歴史的な具体的有用労働の形態でのみ支出されるにすぎない。それだから、超歴史的な生産手段と超歴史的な具体的有用労働とは単に労働過程の二大契機であるだけではなく、労働過程の内部に成り立つ価値増殖過程そのものの二大契機でもあることに注意すべきである。言い換えれば、労働過程がともに超歴史的な生産手段と具体的有用労働とを契機として成り立つということは、労働過程を一般的基礎とする価値増殖過程が生産手段と具体的有用労働という二つの超歴史的契機によって営まれるということに等しい。それゆえに、翻っていえば、宇野弘蔵

氏の主張のように、資本主義的生産は資本という本来的な流通形態が超歴史的に存在する労働過程を包摂したところで成立するがゆえに労働過程が最初に考察されるというのは、[1]価値増殖過程に対する労働過程の位置づけとしては、筋違いな考え方である。価値増殖過程が生産手段と具体的有用労働という労働過程を構成する二つの超歴史的な契機によってのみ成り立つがゆえに、マルクスは、生産手段と具体的有用労働とによって成り立つ価値増殖過程から超歴史的な規定性をもつ労働過程を純粋に分離して最初に考察したのである。

それでは、価値増殖過程は超歴史的な二つの契機のみからなる労働過程において如何にして成り立つのであろうか。それは、購入された労働力が具体的有用労働の形態のままで必要労働をこえる剰余労働を支出することによってである。すなわち、前述の通り、資本の生産過程はともに超歴史的な規定性をもつ生産手段と具体的有用労働とを二大契機として成り立つ。しかし、資本の生産過程が超歴史的な二つの契機によってのみ成り立つとはいっても、資本家はすでに単純流通上で労働力の使用権という特殊な形態において支払った労働よりも大きな生きた労働を獲得済みである。そこで、資本家は初めから剰余労働を吸収するに足る生産手段を用意することによって、労働力の価値を補填する点をこえて労働力を合目的的に消費し、具体的有用労働の形態で剰余労働を創出せしめるのである。そして、特定の使用価値は一般に市場で初めて価値としてあらわれるのと[2]同様に、資本の生産過程で対象化された剰余労働を含む具体的有用労働は市場においてその具体的有用形態を客観的に捨象されその一部分が剰余価値としてあらわれることになる。従って、一労働日に支出される労働量が必要労働と剰余労働とに区別できるのは、ともに具体的有用労働の形態にある必要労働と剰余労働とが市場で労働力の価値をこえる抽象的人間労働に還元される客観的な基礎が存在するからである。それゆえに、資本の生産過程は、その同一の過程が一方で生産手段と具体的有用労働という二つの契機から成り立つ点で超歴史的な労働過程をなすが他方で具体的有用労働の形態で剰余労働が創出される点で特殊歴史的な価値増殖過程をなし、もって労働過程と価値増殖過程との直接的な統一において成り立つのである。それだから、価値増殖過程を労働過程の内部に位置づける

際、生産手段が特定の使用価値としてのみ存在するとともに労働力の支出が具体的有用労働の形態でのみ流動化するという点は決定的に重要である。因みに、不変資本の価値移転が具体的有用労働によって媒介される所以は、生産過程では不変資本が特定の使用価値をもつ生産手段としてのみ存在すると同時に労働力の消費が生産手段との接触により具体的有用労働としてのみ支出されるという事情に立脚して合理的に説明することができるのである。というのも、労働力の合目的的な発揮が特定の使用価値をもつ生産手段との接触によって具体的有用労働として支出されることは、具体的有用労働の支出が必然的に生産手段のもつ特定の使用価値の産業的消費を伴うことを含んでいるからである。[3] 生産過程では具体的有用労働の支出が生産手段のもつ特定の使用価値の消費を随伴することによって死んだ具体的有用労働の移転を媒介し、移転された具体的有用労働は市場において新しく付加された具体的有用労働とともに抽象的人間労働に還元されることになる。不変資本の価値移転が具体的有用労働によって媒介される所以が従来不分明である原因は、不変資本が生産過程で特定の使用価値としてのみ存在すると同時に労働力の発揮が具体的有用労働としてのみ支出されるという二つの事情の曖昧さにある。

それだから、資本の生産過程は労働過程と価値増殖過程との直接的統一をなすといっても、資本の生産過程では労働過程と価値増殖過程とがあたかも二条の平行線のように同時に進行するのでは全然ないのである。価値増殖過程は、生産手段と具体的有用労働というともに超歴史的な契機から成り立つ労働過程を具体的有用労働の形態にある剰余労働の創出過程としてみた労働過程の一面にほかならない。つまり、労働過程という単一の過程は、一方でともに超歴史的な生産手段と具体的有用労働という二つの契機から成り立つ面からみれば超歴史的な労働過程をなし、他方で支出された超歴史的な形態にある具体的有用労働が剰余労働を含む面からみれば特殊歴史的な価値増殖過程を内包するのである。因みに、労働過程と価値増殖過程とが具体的有用労働の支出過程としてのみ実存する単一の労働過程そのものの二面であることは、『資本論』第Ⅰ巻第三篇第五章の中の次の一文が端的に指し示す通りである。

「価値形成過程を労働過程と比べてみれば、後者は、

使用価値を生産する有用労働によって成り立っている。運動はここでは質的に、その特殊な仕方において、目的と内容とによって、考察される。同じ労働過程が価値形成過程ではただその量的な面だけによって現われる。もはや問題になるのは、労働がその作業に必要とする時間、すなわち労働力が有用的に支出される継続時間だけである。」（『資本論』Ⅰ、二〇九ページ、傍点―頭川）

つまり、労働過程と価値増殖過程とが単一の過程の二面であるのは、価値増殖過程そのものが労働過程と同じく具体的有用労働の支出からのみ成り立つからにすぎないからである。従って、一歩突っこんでいえば、マルクスは、『資本論』第Ⅰ巻第三篇第五章においてまずもって単一の労働過程を生産手段と具体的有用労働という超歴史的な契機からなる労働過程として考察した上で、更に同じ単一の労働過程を剰余労働が含まれる具体的有用労働の支出からなる価値増殖過程として分析し、もって資本主義的生産の下での労働過程の総体を究明したということができる。だから、一般に労働過程は超歴史的な過程をなすといっても、それはあくまでも労働過程を成り立たしめる生産手段と具体的有用労働という二大契機のもつ超歴史性に着目した本源的規定にすぎない。逆にいえば、資本主義的生産の下で進行する労働過程は、それが具体的有用労働の形態での剰余労働の創出過程としてみられるかぎり価値増殖過程をなし、決して超歴史的な過程ではありえないのである。従って、労働過程といえば超歴史的な過程であると観念することほど機械的な考え方はない。マルクスが労働過程を超歴史的な過程と規定したのはそれが生産手段と具体的有用労働というそれ自体としては超歴史的な二つの契機によって成り立つかぎりにすぎず、同じ労働過程は剰余労働を含む具体的有用労働の創出過程としてみられるならば特殊歴史的な価値増殖過程として実在するのである。剰余価値が労賃を補塡する点をこえる労働過程の延長によって創造されるあるいは可変資本が労働過程において価値増殖すると表現されるのは、価値増殖過程そのものが特定の使用価値をもつ生産手段と具体的有用労働という労働過程と同じ超歴史的な二契機によって成り立つからである。

「労働過程は、労働力の価値の単なる等価が再生産されて労働対象につけ加えられる点を越えて、なお続行される。」（『資本論』Ⅰ、二一三ページ、傍点―頭川）

「労働力の価値と、労働過程での労働力の価値増殖とは、二つの違う量なのである。」(同右、二〇八ページ、傍点—頭川)

かくして、われわれは、本節において、価値増殖過程が具体的有用労働の支出からなる超歴史的な労働過程を剰余労働の含まれる具体的有用労働の流動化過程として抽象化した労働過程そのものの一面にすぎないことを分析した。(4) 従って、以上の分析からすれば、労働過程が超歴史的な過程でありながら同時に特殊歴史的な価値増殖過程を内蔵するというマルクスの含蓄ある命題は次のように解されるべきである。すなわち、剰余労働を含む具体的有用労働の支出過程として実在する資本主義的生産の下での単一の労働過程は、一方でこれを構成する生産手段と具体的有用労働という二大契機に着目してみれば超歴史的な労働過程をなし、他方で具体的有用労働の形態にある剰余労働の支出という面に着目してみれば特殊歴史的な価値増殖過程として存在する、と。

(1) 「資本主義社会は、流通形態としてあらわれた資本が、一定の歴史的条件のもとで、生産過程を把握することによって成立したものなのである。」(宇野〔2〕二四ページ)

(2) 労働力の合目的的発揮が特定の具体的有用労働としてのみ支出され物質的財貨に対象化された或る具体的有用労働が市場で別種の具体的有用労働と等置される関係の中で初めて抽象的人間労働を分出せしめるという二重的形態にある労働の関係の委細については、拙稿「古典派の価値概念とマルクスの価値概念」(〔13〕)を参照されたい。

(3) 「労働は、生産手段を現実に合目的的に生産手段として消費するかぎり、つねに生産手段の価値を生産物に移すのである。」(『資本論』II、一二六ページ、傍点—頭川)

(4) 宇野弘蔵氏は、単純流通上での価値実体の規定を拒否して生産過程での価値実体の規定を提起された。しかし、生産過程で価値実体を規定しようとする宇野氏の主張の根本欠陥は、生きた労働が単に具体的有用労働の形態にしかないのに誤って抽象的人間労働からも成り立つと取り違えたところにある。つまり、宇野氏の主張の本質的欠陥は、労働力の合目的的発揮が具体的有用労働の形態でのみ支出され、具体的有用労働が市場で初めて客観的に抽象的人間労働に還元されるという価値実体成立の根本条件の無視にある。従って、生産過程で価値実体の規定を与えようとする宇野氏の立論は、抽象的人間労働＝超歴史的範疇説の論理必然的な帰結である。それだから、逆にいえば、抽象的人間労働＝超歴史的範疇説という宇野氏と同一の根本的立場に立脚しながら生産過程で価値実体の規定を与える宇野氏の主張に批判を加える一切の試みは、それ自体の中に前

後撞着の誤りを含むように思われる。

三　管理労働の二重的機能

われわれは、前節において、個々の労働者が労働過程の全領域に参加してめいめい完成生産物をつくるという想定に立って、生産手段と具体的有用労働とを二大契機とする超歴史的な労働過程が同時に特殊歴史的な価値増殖過程として成り立つ両者の固有な内面的関係を確定した。ところが、資本の生産過程は、具体的には、管理労働のもとでの多数労働者による分業体制として営まれ、個々の労働者は一つの完成生産物をつくる社会的労働過程に部分的にのみ参加する。従って、個々の労働者による具体的有用労働の支出が分業体制の下で行なわれる限り、全体としての労働力の合目的的な発揮は労働過程全体に対する管理労働の統括機能を根本前提として初めて成り立つという関係にある。ところが、マルクスによれば、社会的労働過程を管轄する管理労働の統括機能はそのままで剰余労働の創出を強制する搾取機能を同時に果たすがゆえに、資本主義的生産の下での管理労働は超歴史的な統括機能と特殊歴史的な搾取機能との不可分の統一物であるという。そこで、本節では、超歴史的な労働過程が特殊歴史的な価値増殖過程を内包するのと同じように、管理労働の果たす超歴史的な統括機能はそのままで剰余労働の支出を強制する特殊歴史的な搾取機能を発揮する両者の固有な内面的関係を明確化する。

資本主義的生産はマニュファクチュアの機械制大工業への転化を内容とする産業革命によって体制的に確立したが、機械制大工業はそれが分業にもとづく協業体制を基礎とする限り多数の部分的労働力を一つの統一ある全体機構に編成する管理労働を必要不可欠とする。より具体的にいえば、先ず第一に、社会的労働過程をいくつかの特殊部面に分割した上で各部面に必要な数の労働者を配置するのは、管理労働の果たす統括機能の一つの内容である。第二に、社会的労働過程の各部面への分割と各部面への多数労働者の配置とを前提とすれば、管理労働は、部分生産物が或る部面から次の部面へと円滑に移行して労働過程全体では一定の労働時間内に特定量の完成生産物ができるように統括機能を発揮する。従って、分業にもとづく協業体制の下では、完成生産物を共同でつくる多数労働者の個々の部分労働力の合目的的な発揮は、

多数労働者を各作業部面に配置して各部面の総計からなる社会的労働過程の流れを見張る管理労働の統括機能によって媒介されていることになる。つまり、分業にもとづく協業体制の下では、社会的労働過程全体を管轄する管理労働の統括機能によって初めて多数の部分労働力とそれに照応する各生産手段との結合が可能となり、多数の部分労働力の合目的的な発揮が達成されるのである。いうまでもなく、多数の部分労働力の合目的的な発揮を媒介する管理労働の統括機能は、それ自体としては労働過程が分業にもとづく協業体制として営まれる事情から必然的に生じる管理労働の超歴史的な機能である。つまり、管理労働は、それが多数の部分労働者を媒体にして一つの完成した物質的財貨の生産に参加する限りでは、生産的労働の本源的規定が妥当して価値形成労働をなす。

ところが、分業にもとづく協業体制を管轄する管理労働の統括機能は、実はそのままで同時に特殊歴史的な搾取機能を発揮するのである。すなわち、前述の通り、分業にもとづく協業体制の下では、管理労働の果たす超歴史的な統括機能を根本前提にして初めて、多数労働者が各部面で特殊作業を行なう社会的労働過程は全体としてスムーズに進展して一定時間内に特定量の完成生産物を供給することができる。ところが、管理労働の統括機能によって社会的労働過程が成り立つということは、その反面で各部分労働力が一労働日の間中一定の労働強度で具体的有用労働を支出することを強制されるということを含んでいる。けだし、一連の系統的な関連をもつ各部面が管理労働の統括機能の下で次から次へと一定時間に一定量の部分生産物を供給する限りでは、各部分労働力はその合目的的な発揮を休むことができないからである。それだから、分業にもとづく協業体制の下では社会的労働過程を全体として管轄する管理労働は、その超歴史的な統括機能によって労働者をして一定量の具体的有用労働を支出せしめ、具体的有用労働の形態での剰余労働創出を強制する特殊歴史的な搾取機能を果たすのである。換言すれば、管理労働の果たす超歴史的な統括機能は、次から次へと部分生産物を送り続ける各作業部面の全体的機構を管轄して剰余労働を含む一定量の具体的有用労働支出の条件をなすことによって、そのままで特殊歴史的な搾取機能を営むのである。管理労働の果たす超歴史的な統括機能がそのまま特殊歴史的な搾取機能を営むの

は、各部分労働力が剰余労働を含む一定量の具体的有用労働の母胎として購買されたことに起因する。つまり、各部分労働力が剰余労働を創出する独自な使用価値をもつ商品として購買されたことが、管理労働の果たす超歴史的な統括機能に対して特殊歴史的な搾取機能を追加的に上積みするのである。単純流通上で労働力商品がすでに資本主義的生産関係に規定されて剰余労働を創出する独自な使用価値をもつことが、生産過程で行なわれる管理労働の超歴史的な統括機能の中に特殊歴史的な搾取機能を盛りこむのである。

かくて、われわれは、これまでの考察によって、管理労働の果たす統括機能がそのままで搾取機能を発揮する両者の内的脈絡を究明した。従って、マルクスの規定した管理労働の二重性とは、管理労働の果たす超歴史的な統括機能が実はそのままで特殊歴史的な搾取機能を営むという両者の特有な内在的関係を指示するのである。[1] 逆にいえば、管理労働の二重性をもって、管理労働が同時に統括機能と搾取機能の両方を果たすものとして二つの機能を分裂的に理解してはならない。けだし、同じ一つの管理労働が統括と搾取の両機能を演じるというだけであれば、二つの機能の関連は依然として不明のままに留まるからである。因みに、マルクスは、管理労働の果たす統括機能がそのままで搾取機能を営むがゆえに、管理労働では超歴史的な統括機能と特殊歴史的な搾取機能とが不可分な混和状態にあると規定したのである。

「監督や指揮の労働が資本の対立的性格、資本の労働支配から発生するかぎりでは、したがってまたそれが階級対立にもとづくすべての生産様式と資本主義的生産様式とに共通であるかぎりでは、この労働は、資本主義的体制のなかでも、すべての結合された社会的労働が個々の個人に特殊な労働として課する生産的な諸機能と直接に不可分に混ぜ合わされている。」（『資本論』Ⅲ、三九九―四〇〇ページ）

ところで、管理労働の二重性に関する以上の積極的見解に立脚すれば、管理労働の演じる二つの相異なる機能は果たして労働過程と価値増殖過程とにそれぞれ固有に帰属するのか否かという従来の一大論争点に決着がつくことになる。[2] 結論を先回りしていえば、管理労働の発揮する二つの機能はそれぞれ労働過程と価値増殖過程とに固有に内属する。従って、管理労働の発揮する特殊歴史

的な搾取機能はもっぱら価値増殖過程に帰属する。先ず、管理労働の演じる統括機能とは、社会的労働過程の各作業部面に配置された多数の部分労働力がそれぞれ具体的有用労働を支出するための媒介役を果たすことである。従って、管理労働の果たす統括機能は、それが各部分労働力の合目的的な発揮を可能ならしめ特定の使用価値生産に参加する限りでは、超歴史的な労働過程に帰属する。第二に、管理労働の演じる搾取機能とは、次々に部分生産物を供給する各部面からなる労働過程の全体を管轄することによって一労働日中に一定量の具体的有用労働を流動化させ、具体的有用労働の形態で剰余労働の創出を強制せしめることである。ところが、第二節で分析済みの通り、価値増殖過程とは特定の使用価値を生産する労働過程をそのままで必要労働を超過する具体的有用労働の支出過程として抽象した一過程にほかならない。従って、価値増殖過程が具体的有用労働の形態での剰余労働の創出過程であることを承認するかぎりでは、一労働日中に剰余労働を含む一定量の具体的有用労働の支出を強制せしめる管理労働の搾取機能は紛れもなく価値増殖過程に固有に帰属する。それゆえに、管理労働の果たす搾取機能をもって価値増殖過程に固有に帰属する機能として理解する際の鍵は、価値増殖過程をもって具体的有用労働の形態で剰余労働の支出が強制される労働過程そのものの一過程としてとらえる点にある。

かくして、われわれは、本節において、マルクスの規定した管理労働の二重性とはその超歴史的な統括機能がそのままで剰余労働の創出を強制する特殊歴史的な搾取機能を営む二つの機能間の固有な関係を指すということを分析した。従って、管理労働は、それが労働過程に固有な統括機能と価値増殖過程に固有な搾取機能とをあわせて発揮するとすれば、一面では特定の使用価値に物質化される具体的有用労働であると同時に他面では特定の使用価値の形成に直接関係のない具体的有用労働でもあるということになる。つまり、管理労働はそれ自体一つの特定の具体的有用労働であるが、一つの特定の具体的有用労働としての管理労働は、その統括機能のうちに搾取機能を内包するかぎりでは、その一部分しか特定の物質的財貨を形成する特定の具体的有用労働として対象化されないのである。それゆえに、管理労働が統括機能を通じて搾取機能を果たすかぎり、管理労働の継続時間の

一部分は価値を形成せず、生産上の空費に属するのである。

「管理労働の一部分は、資本と労働との敵対的な対立から、すなわち資本主義的生産の敵対的性格から生じ、その生産上の空費に属する。」（『剰余価値学説史』Ⅲ、四九五ページ）

（1） マルクスは、『資本論』第Ⅰ巻第四篇で多数労働者がそれぞれ部分労働に従事して共同で完成生産物を仕上げる社会的労働過程を想定したのに対して、第三篇では個々の労働者が完成生産物をつくる単純な労働過程を想定したために、考えようによっては、相対的剰余価値生産の場合の管理労働は統括と搾取の両機能を発揮するが、絶対的剰余価値生産の場合の管理労働はそこに社会的労働過程の前提がないから単に搾取機能のみを果たすという見解が生じうる。しかし、マルクスが第三篇で想定した単純な労働過程とは、第四篇での社会的労働過程を構成する各作業部面を一つの独立した労働過程として抽象したものにすぎず、絶対的剰余価値生産は現実的には社会的労働過程としてのみ成り立つ。剰余価値生産の本質規定を与えるに際して個々の労働者が部分労働に従事するか否かは概念上関係がないために、マルクスは第三篇で単純な労働過程を想定したにすぎない。分業にもとづく協業体制は、資本主業的生産がその基礎上で成り立つ出発点である。従って、個々の労働力の合目的的な発揮が社会的労働過程を構成する各作業部面で行なわれる以外にないかぎり、管理労働は、絶対的剰余価値生産の場合も相対的剰余価値生産の場合も、統括機能を通じて搾取機能を果たすとみるべきである。

（2） 管理労働の果たす二重的機能がそれぞれ労働過程と価値増殖過程とに固有に帰属するか否かをめぐる一大論争点については〔6〕〜〔9〕の文献をみよ。

むすび

われわれは、本稿において、マルクスの規定した管理労働の二重性とは、単に管理労働が統括機能と搾取機能とをあわせて演じるという両機能の同時性をいうのでは全然なくて、その統括機能がそのままで搾取機能という概念上峻別される特殊歴史的な機能を発揮する二つの相異なる機能間の内面的関係を指すことを解明した。従って、本稿の積極的な分析を踏まえるならば、管理労働がもっぱら物質的財貨の生産に参加する統括機能だけを営むという表面的な観念は、統括機能がそのままで搾取機能の役割を演じる客観的な事情から必然的に生じるということになる。言い換えれば、管理労働の果たす統括機能が資本主義的生産の基礎上ではそのままで搾取機能を

発揮する事情を客観的な根拠として、管理労働は単純に物質的財貨の生産に従事する生産的労働としてのみ必然的に現象するのである。それゆえに、管理労働の果たす超歴史的な統括機能がそのままで特殊歴史的な搾取機能を発揮するという管理労働の二重性に関するマルクスの理論は、管理労働が表面的には物質的財貨の生産に従事する生産的労働としてもっぱら現象する必然的根拠を内包しているのである。

参考文献

〔1〕 宇野弘蔵『経済原論』『宇野弘蔵著作集』第一巻、岩波書店、一九七三年。
〔2〕 宇野弘蔵編『現代経済学演習講座新訂経済原論』青林書院新社、一九六七年。
〔3〕 J・S・ミル『経済学原理』(一)、岩波文庫、末永茂喜訳。
〔4〕 吉原泰助「資本の生産過程と労働の二重性」『マルクス経済学体系』I、有斐閣、一九六六年所収。
〔5〕 見田石介「宇野弘蔵氏の価値論」『見田石介著作集』第五巻、大月書店、一九七七年所収。
〔6〕 角谷登志雄「『資本論』と管理規定」『立命館経営学』第一三巻第五・六号、一九七五年。
〔7〕 篠原三郎「マルクスの管理論」『立命館経営学』第一三巻第二号、一九七四年。
〔8〕 稲村毅「資本主義的管理の二重性」『経営研究』第二九巻第三号、一九七八年。
〔9〕 浅井啓吾「資本制的管理の二重性」『経済系』第一〇五号、一九七五年。
〔10〕 浪江厳「労働に対する資本の指揮について」『大阪産業大学論集（社会科学編）』第三七号、一九七三年。
〔11〕 仲田正機「協働の組織と管理の機能」『長崎県立国際経済大学論集』第八巻第一号、一九七四年。
〔12〕 吉村幸男「管理労働と生産的労働規定」『一橋論叢』第八〇巻第五号、一九七八年。
〔13〕 頭川博「古典派の価値概念とマルクスの価値概念」『高知大学学術研究報告（社会科学）』第三〇巻、一九八一年。
〔14〕 頭川博「貨幣の資本への転化とは何か—単純流通と貨幣の資本への転化—」『高知大学学術研究報告（社会科学）』第三一巻、一九八二年。

（高知大学助教授）